

《資料紹介》

校祖渡邊辰五郎翁の手跡 - その2 -

林 宏一

《Report on Investigation of Museum Collections》

The handwriting of Tatsugoro Watanabe - 2 -

Kōichi HAYASHI

はじめに

本紀要第16集・18集において、当博物館所蔵の辰五郎翁書簡及び手跡の調査成果を報告した。

引き続き所蔵資料の整理研究を進めるなかで、新たに辰五郎翁自筆とみなされる『結方折方（むすびかたおりかた）』の筆写本と『裁縫雛形解説付箋』が確認された。いずれも署名、書写年月日等の記入がないものの、その特徴ある書体や本紙中に押された印等から辰五郎翁の手になるものと判断されるので、ここにその内容を紹介し、大方の参考に供することとしたい。

1. 『結方折方之傳写本』 二冊

やや色あせた青い布表紙の横長型和綴本で、『折方』と『結方』の二分冊となっている。

いずれも表紙・裏表紙とも布地（木綿、藍染か）、背は三目綴、本紙は袋綴。表紙の布は地色褪せ、スレ、シミ、虫食い痕が数か所ある。寸法は『折方』（縦）13.0×（横）19.3cm×（厚）約0.5cm、『結方』12.8×19.9cm×約1.0cmを測る。各冊の概要は以下のとおり。

(1) 『折方』の冊

表紙題箋（白和紙？ 9.4×6.4cm）

「紐結包物^{カカカ}教授法

石井泰郎^{カカ}書物

結方折方之傳写本」

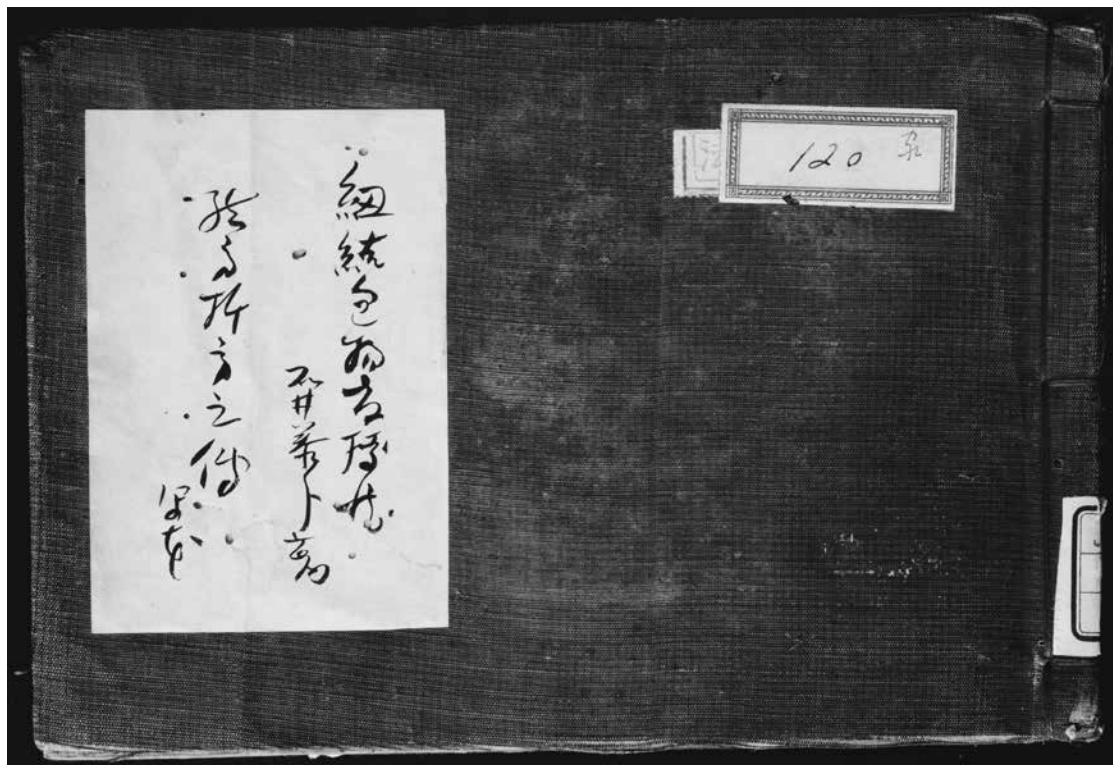
見返し 和紙白地 右端中央に朱文方印「封？（篆書一字）」（0.9×0.8cm、裏表紙にもあり）、綴目中ほど本紙にわたって朱文方印「東京裁縫女学校図書参考品」（5.1×5.1cm 印文楷書）、また、下の木口に「番外折形圖」の墨書あり

本紙 和紙 袋綴 31紙62頁

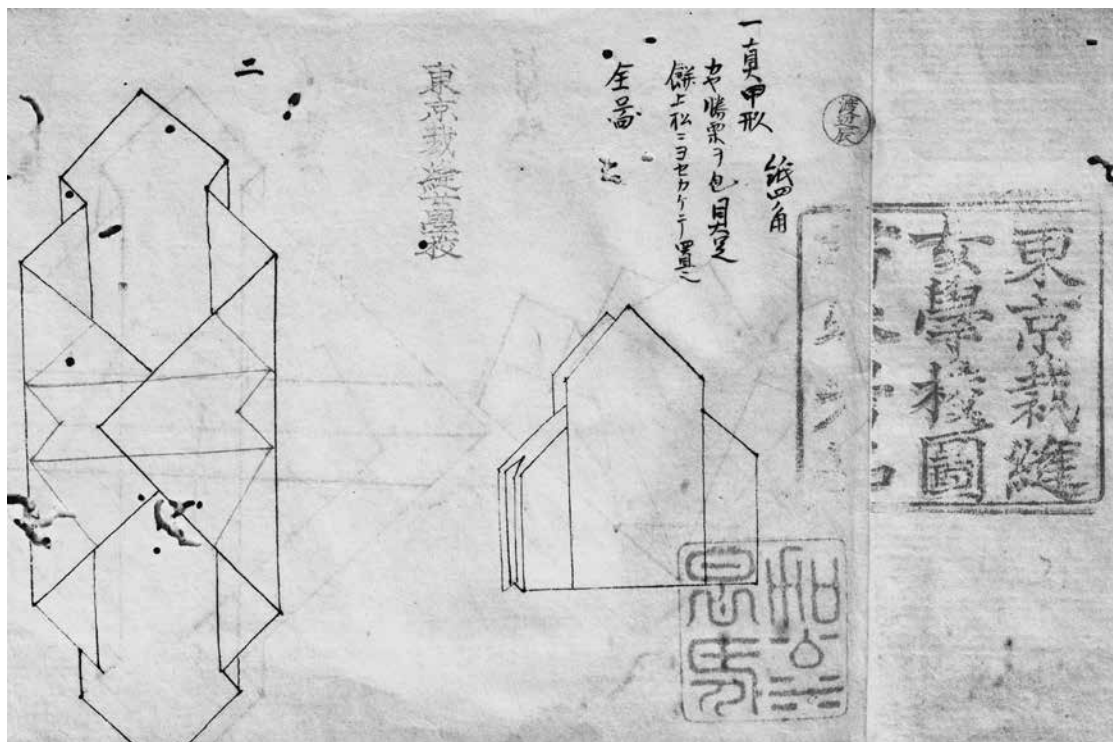
各頁上段に「甲形」等の各種紙の折方の名称と簡単な注記を墨書し、その他の余白に「つけペン

(ガラスペン)」と定規を用いて折方の具体的な見取図を描く。

1頁の綴目上方に朱文円印「渡辺辰」(径0.9cm)、綴目下方に朱文方印「印文不明(篆文四字)」(3.1×2.9cm)、中央上方に朱文「東京裁縫女学校」(枠なし 3.4×0.9cm)の押印がある。



『折方』の冊 表紙



『折方』本文第1頁 右上に「渡辺辰」印 ※「真」は、折方における真行草の「真」を表す

(2) 『結方』の冊

表紙題箋なし、見返しは和紙白地。

内表紙 『結方図 全』の題を墨書。題下方「全」字にかかって印文不明の朱文隅丸方印(3.1×2.9 cm)、題右脇に朱文方印「東京裁縫女学校図書参考品」(5.2×5.2cm)の印がある。また、綴目上下に黒文楕円印「印文不明」(1.4×? cm)の割印がある。裏は白。

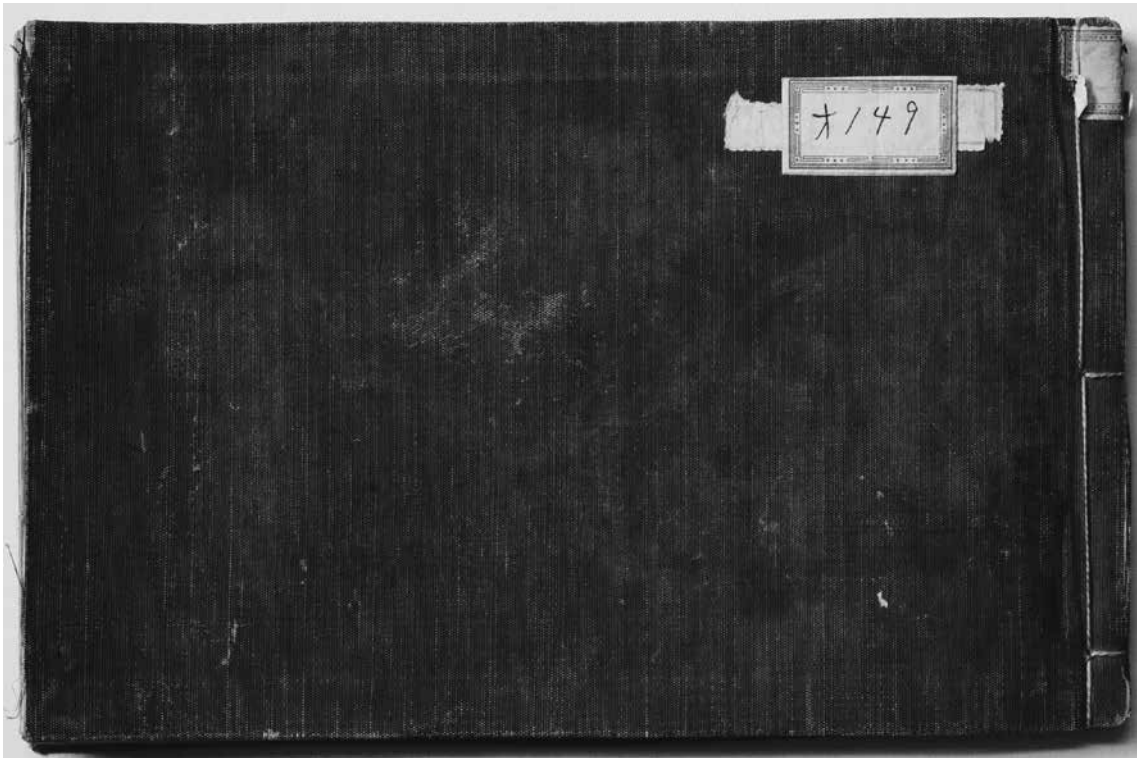
木口下に「結形之圖」の墨書がある。

本紙 和紙 袋綴 62紙126頁

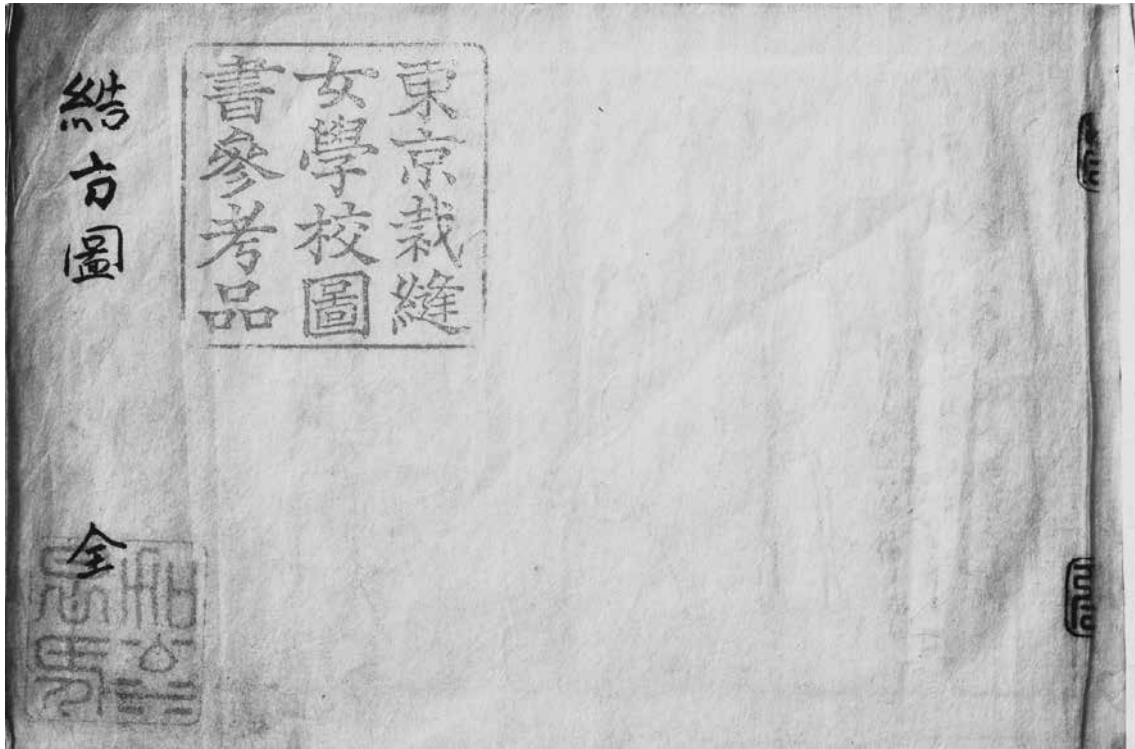
『折方』冊と同様各頁上段に「五行結」等の各種紐の結方の名称を記し、その下方や左脇に簡単な解説を記し、その他の余白に「つけペン(ガラスペン)」を用いて具体的な結方の見取図を描く。

1頁 綴目上方に朱文「東京裁縫女学校」(枠なし 3.4×0.9cm)、綴目下方に朱文丸印「渡辺辰」(径0.9cm)の印がある。

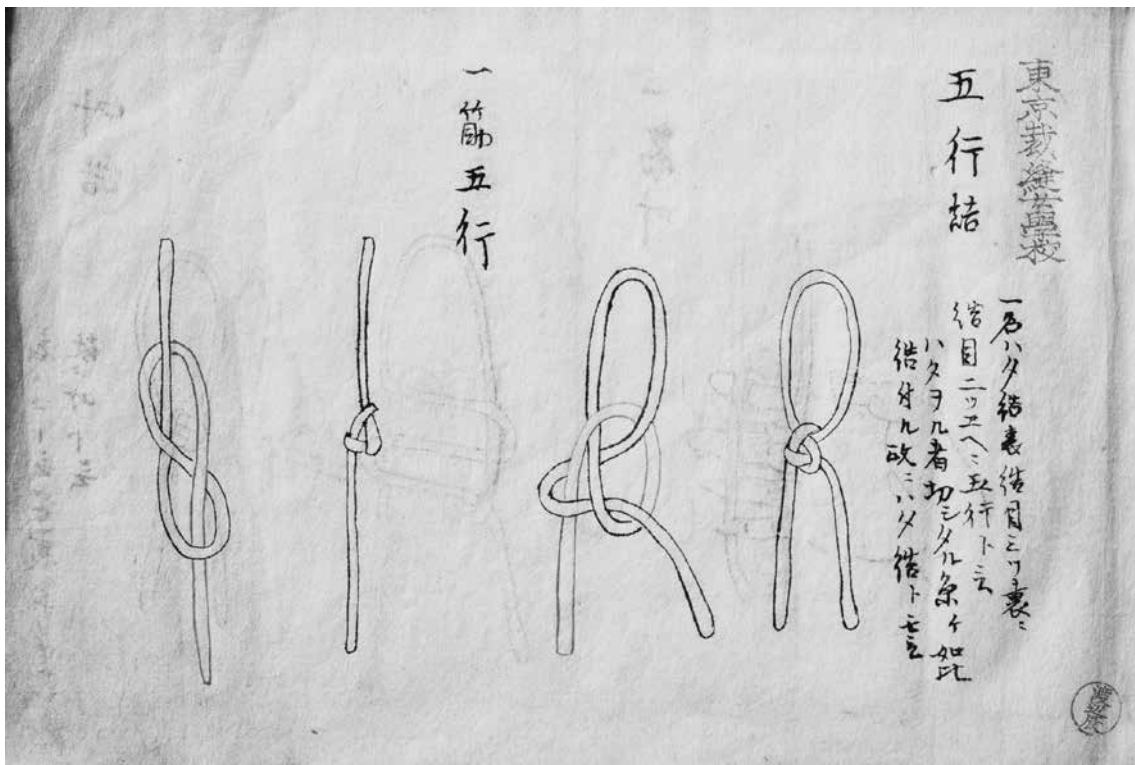
本冊には、主に組紐を用いた各種結び方の実例が収録されている。前半は概ね「総角結(あげまきむすび)」、「華鬘結(けまんむすび)」、「花結」、「蜻蛉結(とんぼむすび)」等飾り結びの例が多いが、後半には「文箱」、「手箱」、「軸物箱」あるいは「棗」や「香炉」等の仕覆、さらには「軸物・卷子」等の緒結など、われわれが日常に用いる器物や美術工芸品に関わる紐結びの諸例が取り上げられていて、『折方』冊にくらべると親しみやすい内容となっている。



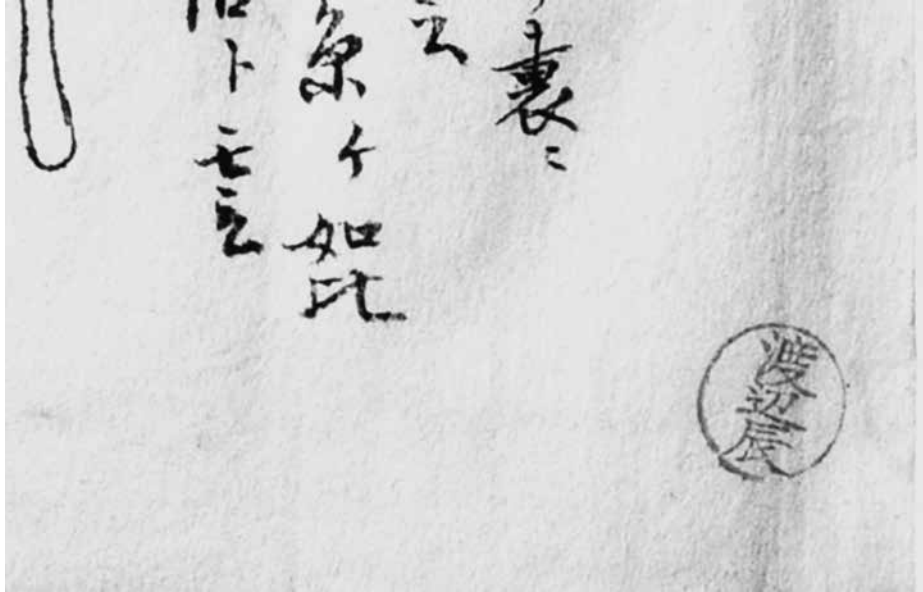
『結方図』の冊 表紙



『結方』の冊 内表紙



『結方』の冊 本文第1頁「五行結」



『結方』の冊 本文第1頁 「渡邊辰」印

この『結方折方之傳写本』が校祖辰五郎翁の筆写になると推定する根拠は、次の2点による。

一つは、冊中に記された標題や解説の書体が、辰五郎翁の他の書簡類に見られる書体に共通する特徴を見せること、二つは、それぞれの冊第1頁と最終頁に押された朱文丸印「渡邊辰」の存在による。

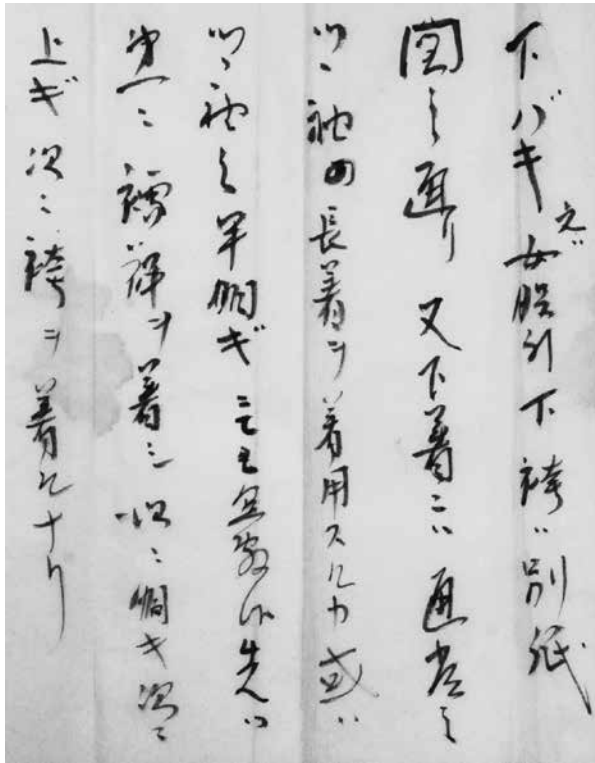
まず一の書体についてだが、古書の写本に用いられた、或る意味限定された使用範囲での書体と、日頃自在に使用している普段使いの書体とでは比較同定することはなかなか難しいところがあるものの、漢字やカタカナの字形や筆運び、書き癖や全体の字配りに共通した特徴が認められる。

例をあげるなら、写本に見えるカタカナの「ツ」、「ハ」、「ル」等と明治34～6年頃と推定される辰五郎翁自筆の宛先不明「改良服関係書簡」（資料3150）に見られる書体の類似、あるいは漢字「用」字に見られる字形の共通性等は、筆者が同一人物であることを示しているとみなされる。

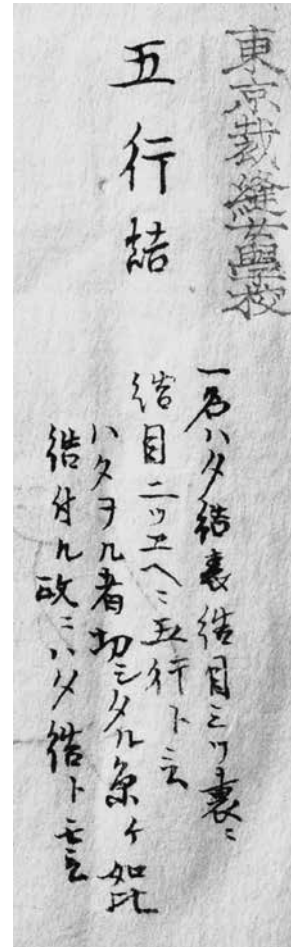
二の「渡邊辰」の朱文丸印は、『折方』・『結方』の第1頁と最終頁に各々1顆ずつ押されている。この「渡邊辰」印は「渡邊辰五郎」の略称を印影としてものであることはいうまでもないが、書写した各冊の初頁と最終頁に認印を捺したのは、辰五郎翁自らがこれを筆写したことを証するとともに自身の所有物であることを明示するための所為と理解される。この印は、これまで確認されている辰五郎翁の印譜にはなく、当写本のみに見られる印であることにはいささか心許ないところがないではない。しかし、かつて当紀要第18集で紹介した、明治6・7年頃の発行と推定される辰五郎翁自筆の「星野サマ宛代金受取書」には、「渡邊辰」との略称で署名していることからすると、こうした印があっても別段不審ではない。

写本の書体の共通性ととともに、この印の存在によって、当写本が辰五郎翁の手になることを示しているものとみなされる。

以上の2点を拠り所として、当写本は辰五郎翁自筆になるものと判断しておきたい。



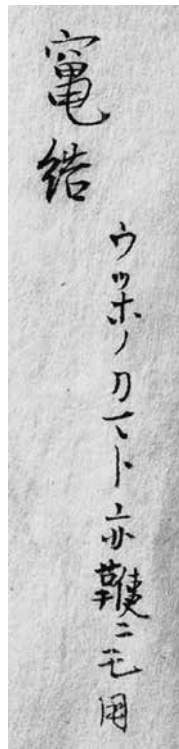
宛先不明改良服関係書簡



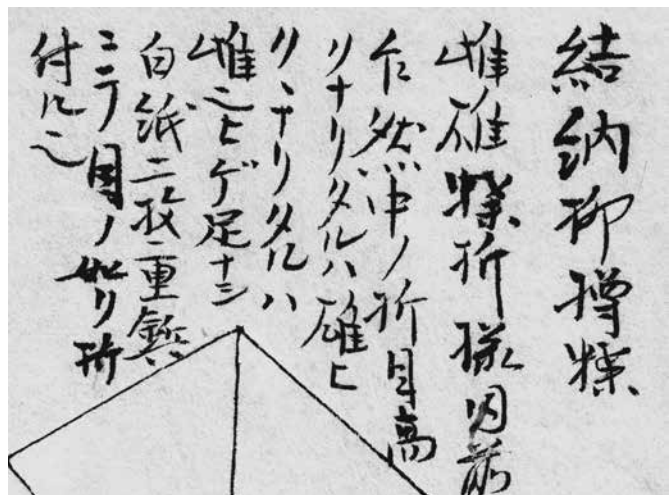
【結方】五行結の条



改良服関係書簡



【結方】竈結の条



【結方】結納柳樽蝶結の条

ちなみに辰五郎翁は公私の場で多くの印を使用したと考えられるが、現在確認されている印は、授業の実技成果品に対する検印や裁縫教科書等出版物の検印等のみで、意外とその種類は少ない^(註1)。ここに新たに当「渡辺辰」印を、翁の印譜に登録しておこう。

さて、そもそも『結方折方之傳』とは、いったいいかなる書物なのであろうか。その名称や内容から、わが国伝統の紐の結び方、紙の折方（包方）の諸例や約束事をまとめたものであることは明らかである。

本写本のうち『折方』の表紙題箋に「紐結包物^{カカカ}教授法／石井泰郎^{カカカ}書物／結方折方之傳写本」と見えることからすると、石井泰郎なる人物が所有する「紐結包物教授法」という書物の1章に『結方折方之傳』なるテキストが所収されていて、それを辰五郎翁が写したものと理解される。

この『結方折方之傳』なる書物の原本や著者、刊行年についてはなんら触れるところがないのだが、この分野の基本図書としては、江戸中期の有職故実・武家礼法の研究家伊勢貞丈（1717～84）が著した『包結記』（つつみむすびのき）が知られている。わが国古来の結方折方に関しては唯一といってよいテキストであり、当写本の内容からみても、おそらく同書が原本となるものと推定される。

別に『国書総目録』には、松岡家伝と称する『結形折形口伝』という本が登載されているが、その内容や当書或いは『包結記』との関係は不詳である。併せて『国書総目録』は、大正年間「石泰」という人物による同書の写本の存在を紹介している。「石泰」という略称からすると、本書『折方』表紙の題箋に名を見せる「石井泰郎」その人と推定されが、この人物がいかなる人であるかは、今のところ手がかりがなく一切不明である。『国書総目録』にあるとおり大正年間の写しとなると、「石井泰郎」はその頃の人であり、すでに明治40年（1907）に他界している辰五郎翁の世代とはややずれが生じることになるが、その頃の成人の活動期をおおむね30～40年と考えるなら、辰五郎翁の活動期と重なっていた可能性は大いにあるとみなされる。あるいは両者はこの分野のことで何らかの交流があって、この写本が成立したかもしれない。後考を俟ちたい。

2. 裁縫雛形解説付箋 15点

当資料は、平成22年高木咲子氏から寄贈を受けた裁縫雛形の中の一部である。かつて業者から譲り受けたものということで、総数117点、このうち解説付箋が附されたものは15点あった。

当資料の詳細については、すでに当館学芸員三友晶子さんが本紀要第19集『標本としての裁縫雛形』（2014年2月）において優れた研究成果を発表されているので、その成果に拠りながら以下の記述を進めていきたい。

高木氏寄贈の117点の雛形は、生地や品目等の特徴をはじめ、一部に「渡邊氏之印」が押されていたり、明治34年卒業生の名前を記されたものがあることから、まちがいなく本学の前身東京裁縫女学校時代の雛形であることが確認された。東京裁縫女学校の図書館（明治37年7月開館）には、学生が制作した優秀な雛形や教員制作による雛形を標本として収蔵・保管し、実習・研究の資として学生や卒業生の利用に供する「参考品制度」という資料管理体制があり、本資料は、それに属す

る資料の一部と判断された。このうち解説付箋つき雛形は、はじめから学生及び卒業生の学習や研究用の標本として製作されたものとみなされ、製作者は教員の可能性が高いとのことである。

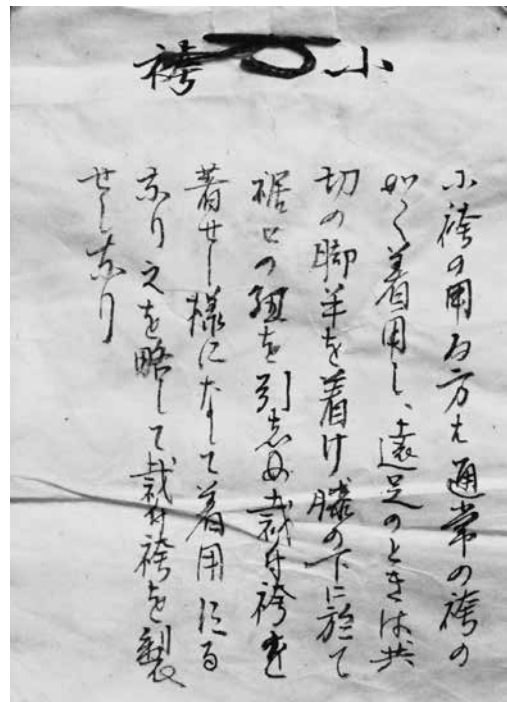
付箋は主に古い時代の衣服、儀礼服、民族服に附されており、ほぼ名刺大（10.0×7.1cm）あるいはその半切ほど（6.9×5.1cm）の白い洋紙が用いられている。体裁は、まず雛形の品名を上部に右から横書きし、その下に縦書きで数行（3～8行程度）にわたって用途、由来、生地等の解説を墨書しており、それぞれの雛形の所定の箇所に赤もしくは紫の絹糸で縫い付けている。

ここに取り上げたのは「小袴」の解説付箋である。背面腰板下に名刺大の付箋が紫の絹糸で縫い付けられており、標題は右書きで「小袴」、その下に7行にわたって行書交じりの細字で「小袴の用方は通常の／如く着用し、遠足のときは、共／切の脚半を着け、膝の下に於て／裾口の紐を引きしめ裁付袴を／着せし様になして着用する／なり之を略して裁付袴を製／せしなり（／印は改行を示す）」と解説がある。

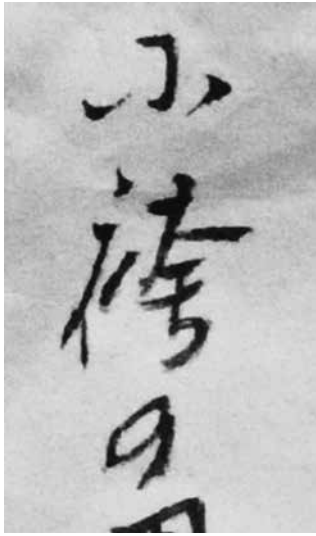
ここに見られる書体は、明治35・36年頃に辰五郎翁が送った宛先不明改良服関係書簡や登与子宛書簡等^(註2)の書体に共通する癖が認められる。例をあげるなら、前の『結方折方之傳写本』のところで取り上げた「用」をはじめ「袴」、「着」、「服」等の漢字の字形、あるいは「る」、「なり」等のひらがなの字形等がそれである。いくつかの図版で、それを確認してみよう。



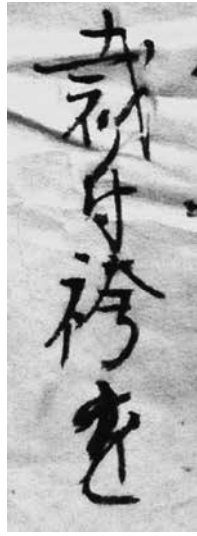
雛形「小袴」



同付箋



付箋「袴」字



宛先不明改良服関係書簡「袴」字



「着用」字



「なり」字



(左) 付箋「小袴」 (右) 宛先不明改良服関係書簡部分

上の図版に見られるとおり、付箋の「袴」字と書簡の「袴」字は、楷書風と行書風の書体の違いはあるが、「衣」偏や傍の「大」字の字体、筆運びに特徴ある癖が認められる。併せて例示した「着用」、「なり」の字体も同様の共通性が認められよう。次の図版に見られる「裁付袴」付箋の書体と宛先不明改良服関係書簡の書体も同様の指摘ができる。




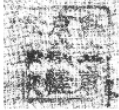
ここに見られる「用」の字体やカタカナの書風も同様の特徴が認められよう。先細の筆先を軽く紙面において、いくぶん跳ねるような筆運びで書いているのは、辰五郎翁独特のものといえる。






これにより本雛形解説付箋も、辰五郎翁自筆になるものと判断してよいものとする。付箋の傷

註

- 1 既に三友晶子さんが、本館の「雛形」常設展示において、生徒制作の雛形に押された辰五郎翁をはじめ二代目校長滋等の検印を収集され、一覧表を作成されているので、ここに紹介させていただく。

検印の種類

			
之渡 印氏邊	校縫東 檢女京 印學裁	見五渡 之郎邊 印之辰	女京私 學裁立 校縫東

				
渡 辰	渡 滋	普 滋	師 滋	高 師
渡邊辰五郎の略	渡邊滋の略	普通科 渡邊滋の略	師範科 渡邊滋の略	高等師範科の略

- 2 「《資料紹介》校祖渡邊辰五郎翁の書簡」 林宏一 東京家政大学博物館紀要第16集 2011.

追記

本稿をなすにあたって、当博物館学芸員三友晶子さんに数々の御教示・御協力をいただいた。厚く御礼申し上げたい。

また、文字の解説、資料の探索、原稿作成等にあたって、次の方々に御協力・御支援をいただいた。お名前を記して感謝の意を表させていただく。(順不同、敬称略)

重田正夫 (元埼玉県立文書館)

事務長太田八重美 当館学芸員菅野ももこ 高橋佐貴子 鈴木桃子

